

駿河蒔絵

蒔絵とは、漆工芸加飾法の代表的なもので、漆で模様を描いて、漆の乾かないうちに金銀錫粉や色粉を蒔きつけ、文様を表したものです。

粉の種類から「消粉蒔絵（けしふんまきえ）」、「平極蒔絵（ひらごくまきえ）」、「本蒔絵（ほんまきえ）」に分類され、工程からは「平蒔絵（ひらまきえ）」、「研出蒔絵（とぎだしまきえ）」、「高蒔絵（たかまきえ）」に分類されます。これらの技法が複合して施されたり、また「螺鈿（らでん）」「平文（ひょうもん）」、「切金（きりがね）」、「彩漆（いろうるし）」などが併用されたりします。さらに蒔絵の技法を地蒔に応用したものに「平塵（へいじん）」、「沃懸地（いかげじ）」、「平目地（ひらめじ）」、「梨地（なしじ）」があります。

蒔絵の歴史は古くは、奈良時代の正倉院の太刀に既に技法が使われていて、平安後期から螺鈿の併用がおこり、鎌倉時代になって蒔絵の基本技法がほぼ完成しました。室町時代以降に技法が更に発展し、桃山時代には自由な意匠と簡単な技法で大胆な表現が行われるようになりました。桃山後期から江戸初期にかけて本阿弥光悦に代表される独自の技法が現れましたが、全般に細工的、類型的で細かい技法に走り、芸術性は失われていきました。

その後は、印籠蒔絵や刀の鞘の装飾に蒔絵や各種の漆芸を応用するようになります。

駿河蒔絵の始まりは、文政 11 年（1828）、駿府に住む塗師中川専蔵が信州の画家天領に蒔絵技術の教えを受け、取り入れたのがきっかけであるといわれています。この時から、現在見られるような花鳥草木を描いたものが取り入れられるようになったのです。

さらに、天保元年（1830）江戸から二人の蒔絵師が駿府を訪れ、技術を伝授したことから当時の蒔絵技術がますます向上していきました。

この二人から教えを受けた蒔絵師によって、後に駿河蒔絵の流派が生まれ、それぞれに特徴をもった蒔絵が生み出されました。

明治 20 年頃「静岡漆器組合」が組織されます。明治 33 年（1900）には、中條重太郎が中心となり、静岡漆工青年会が創立し、その後静岡図案会と改称します。翌年には静岡漆器組合徒弟学校が設立されます。

静岡図案会では毎年漆器意匠製品の展覧会を開催、大正 12 年になり、長期意匠図案講習会を開催して、昭和 3 年（1928）に第 1 回目の正式蒔絵講習会を開きました。昭和 18 年（1943）まで講習会を継続しましたが、戦争が激しくなり一時空白の期間を持たざるを得ませんでした。

戦後になり、蒔絵の技術は進駐軍向けの「アルバム表紙宝石箱オルゴール」、内地向けには漆鏡台、姫鏡台、硯箱、雛道具、塗下駄などに施されることが主でした。

昭和 22 年（1947）7 月 15 日「静岡県蒔絵工業協同組合」が組合員 161 名、出資金一口 16000 円で設立されました。

静岡の蒔絵デザインの新しさと変わり塗りの多様さが相まって特色ある漆器産業として静岡の名を高める源となっています。